残す伝える
とやまの戦争遺構
＜上＞

富山空襲 漂着遺体弔う

島尾海岸の地蔵尊（氷見）



長い読経の後、地元の住民らが静かに手を合わせた。12日、氷見市の島尾海浜公園で執り行われた慰霊祭。海越しに富山市の方向を見つめるようにして立つ地蔵尊を前に、約70人が平和を願った。

富山市中心部を焼き尽くした1945年8月の富山大空襲では、熱さから逃れようと川に飛び込んだものの力尽き、富山湾に流れ出た遺体が数日後になって各地の海岸に漂着したとされる。この地蔵尊は、長さ約800メートルの島尾海岸に流れ着いた犠牲者11人を弔うため、戦後30年に当たる75年8月に島尾地区の有志が建てた。

地蔵尊の台座に埋め込まれた金属板には、当時の壮絶な様子が刻まれている。胸に赤子をしっかりと抱いた若い母親や、離れぬよう手をひもで縛り合った12、13歳くらいの姉と、6、7歳くらいの弟の遺体もあったという。

地元の人たちは、遺体を漂着した場所のそばにある松の木の根元にそれぞれ埋葬し、墓標代わりの石を置いて供養した。島尾自治会の嶋敏雄会長（75）は『石には絶対いたずらしちゃいかん』と、大人から子どもへ、戦争の記憶と一緒に伝えられてきた」と振り返る。

住民が建立 毎年慰霊祭

12日の慰霊祭では国泰寺（高岡市）の澤大道管長らが読経し、地元の住民や富山大空襲を語り継ぐ会の会員ら約70人が焼香した。「地元の人たちが守ってきた地蔵尊に今後も平和を願い続けていきたい」。澤管長は読経を終え、そっと参列者に語りかけた。

地蔵尊の建立後は、毎年決まってこの日に地域の高齢者から児童まで幅広い世代が参列し慰霊祭を開いてきた。戦時体験を子どもたちに伝える講話も幾度か行ったことがある。だが、今年は新型コロナウイルス感染拡大を受け、地元児童の出席は昨年に続いて取りやめることになった。

新型コロナの影響に加え、終戦から長い時がたち、戦争を語り継ぐのが年々難しくなっている。漂着した遺体を埋葬した経験を語ってくれた人も、5年ほど前に亡くなったという。

嶋会長は「戦争の悲惨さ、平和の尊さを何らかの形で伝えていかなくてはならない」と強調する。丁重に無縁仏を弔った地域の先輩たちの行為は、自分にとっても誇りだ。「その温かい心持ちも忘れず、次の世代へ受け継いでいきたい」

（米谷彰夫）

◇

戦後76年。戦争体験を語ることのできる人が少なくなる中、戦禍の記憶や平和の意義を伝える遺構や遺物の重要性が高まっている。県内で保存と継承に取り組む人たちの思いに耳を傾ける。


地蔵尊を見上げる島尾自治会の嶋会長＝氷見市の島尾海岸


12日に地蔵尊前で行われた慰霊祭